「生きている建築」をめぐるノート

Towards a Living Architecture

平田　晃久

生きている建築をつくること、それが僕の夢だ。
しかし、そんなことは可能なのだろうか。

── 度合としての生命

生命と建築の関係について繰り返されてきた、二つの見方がある。
一つ目の見方に従えば、建築はあくまで人工物＝非生命の世界に属し、生命の形態や仕組みを模倣したり、メタファーとして創造のきっかけにできるに過ぎない。建築を構成する床や壁や柱は、生命体の構成要素のように新陳代謝したり自己複製したりしないからである。

しかし、少し視野を広げると、全く別の見方も可能だ。たとえば建築や都市を、はるか上空から、観察のタイムスパンを100年とか1000年に広げて（時間を早回しにして）眺めることを想像してみてほしい。そこでは建築や都市は、群生するキノコのようにめまぐるしく生まれ変わる、生きている秩序そのものである。

一つ目の見方では、生きている建築をつくることは不可能である。二つ目の見方では、建築は常に既に生きている世界の一部なのだから、それだけでは新しい制作の原理には結びつかない。

しかしここで、生命／非生命という単純な二項対立を超えて、生命というものをある種の度合として捉え直すことができたら、別の議論が可能ではないか。

たとえば、ジャングルの一本の樹には数百種の生物がいるという。そこには、無数の生態学的ニッチ[註1]が生まれている。これに砂漠のような状況を対置すれば、ここでいう生命の度合の含意が分かるだろう。砂漠のような状況から次第にジャングルができるように、生命活動にはより多様に生態学的ニッチを生みだし、生命の度合を高めていくような働きが、備わっている。

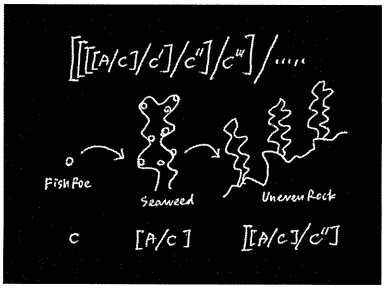


図1　子持ち昆布のダイアグラム

1）特定の種が棲むことのできる環境のセットのこと。

── からまりしろ

〈からまりしろ〉とは、生命の度合を高めていく運動体としての建築を捉えるための造語である。人間の活動を含めた様々な事物が「からまる」ための「しろ」＝余地として、建築を捉えること。同様の構造は、生きている世界の至るところに見出すことができる。たとえば、子持ち昆布。魚卵は海藻にからまり、海藻は海底の凸凹の岩にからまる（図1）。このとき階層は魚卵にとっての、岩は海藻にとっての〈からまりしろ〉である。

生命の世界に通底するからまりの構造を建築設計と結びつける手がかりとして、

2）形態論的展開／からまりのニッチ性
生命の度合を増やすことは〈からまりしろ〉の最大化を意味する。これは第一義的には、事物のインターフェイスとなる表面を増やすことにつながり、表面積や周長を最大化する幾何学が浮かび上がる。たとえば一本の単純な直線と、「ペアノ曲線」として知られるフラクタルなひだを比較すれば、後者の方が限られた広がりの中により多くの周長を内包できることが分かる。多様なニッチが生まれれば生まれるほど、様々なからまりが誘発される（ニッチ性）。
このような思考の延長上で、ひだのような幾何学を植物の種（たね）のように成長させ、住宅としてのプログラムに適合させた「Architecture Farm（2007）」（図2、3）などが生まれた。

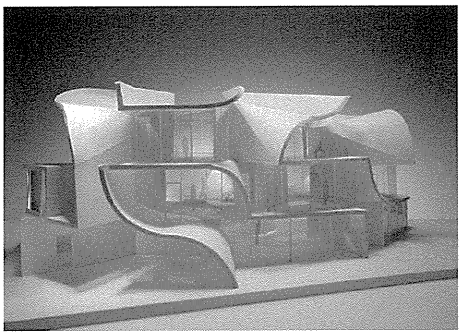


図２　Architecture Farm

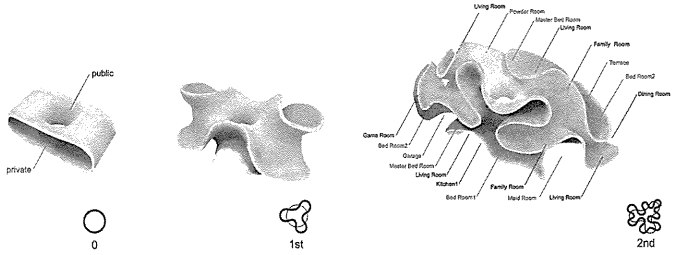


図３　Architecture Farm　概念図

最近、三つの特性を抽出できるのではないかと考えるようになった。すなわちからまりのニッチ性／階層性／他者性である。これらは、〈からまりしろ〉の具体的展開として想定される三つの方向性（形態論的展開[註2]、方法論的展開[註3]、設計主体の拡張）にほぼ対応している（もちろんこれらは、最終的にからまり合わなければならないのだが）。

―― 設計主体の拡張／からまりの他者性

子持ち昆布のダイアグラムには、階層構造を形成する魚卵、海藻、岩は互いに異なる出自を持つ他者である、ということも示唆されている。互いに無関係なもの同士が階層的にからまり合いながら、豊かな混成系を成している。

それは 1960 年代のメタボリストたちの考えた統一的システムとは異なっている。むしろ行き当たりばったりと言っていいほど異質なもの同士が、からまる／からまられる、の関係でたまたま出会っている。魚卵／海藻／岩のあいだにはある種のギャップがあり、そこに岩が形成され、海藻がからみ、成長し、魚が卵を産み付け……という履歴が刻まれている。

建築が異質なもののギャップをはらんだ階層構造であり得るとしたら。そして建築設計のプロセスがそうしたギャップごとの履歴として刻まれるような、様々なものを巻き込んだ時間的プロセスであり得るのだとしたら。そこには狭義の設計主体を超えた様々な人々が設計上の決定にかかわる余地が生まれはしないだろうか。そのことによって「コンセプト」が「不明瞭」になるどころか、ますます異質でますます混成した、生きている度合いの高い建築が生まれる可能性が秘められていはしないだろうか。

―― 群れから浮かび上がるもの

現在建設中の『太田市美術館・図書館』（図６、７）は、閑散とした地方都市の駅前に、再び人の流れ（＝生命）を取り戻すべく市民や様々な関係者と協働しながら設計を進めたプロジェクトである。５カ月という短い基本設計期間の中で、複数回の市民ワークショップを行うことが半ば義務付けられていた。私たちはそ

３）方法論的展開／からまりの階層性
子持ち昆布のダイアグラムからも分かるように、からまりは階層構造をもつ（階層性）。これは [[魚卵／海藻] ／岩] と表記でき、一般的には、[[[[[[[[[A1/A2]/A3]/A4]/A5]/…]/An]…と記述できるだろう。自然界ではこうした階層構造が重層し合っているわけである。建築はこの階層構造の部分をなす。してみれば、建築設計の内的原理としてそれを取り入れても良いはずである。「Tree-ness House（2009）」（図４、５）は、[[植物／ひだ] ／箱] という階層構造をもとに設計した建築である。

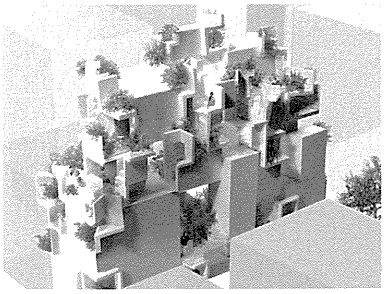


図４　Tree-ness House

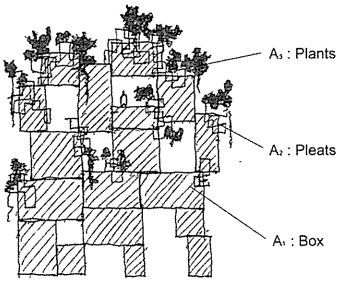


図５　Tree-ness House　概念図

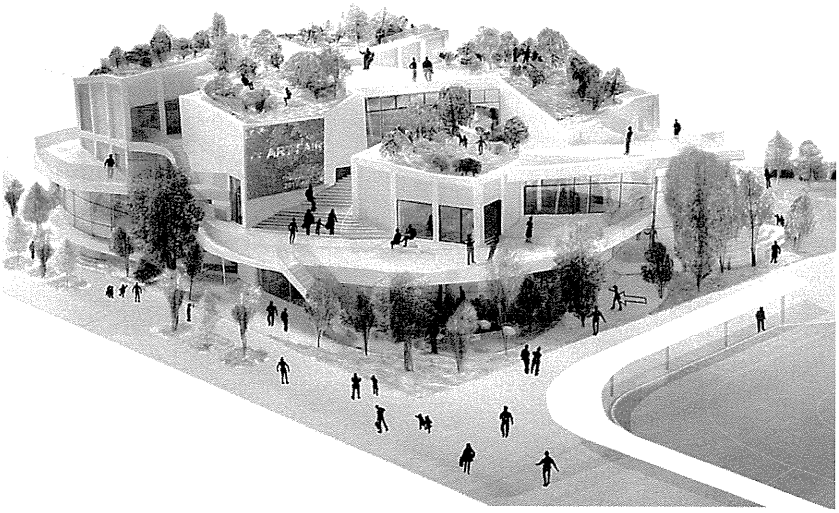


図6　太田市美術館・図書館

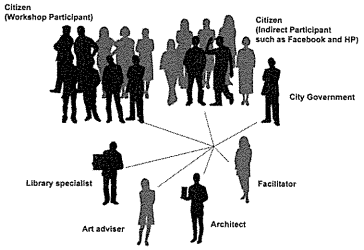


図7　太田市美術館・図書館
ワークショップ概念図

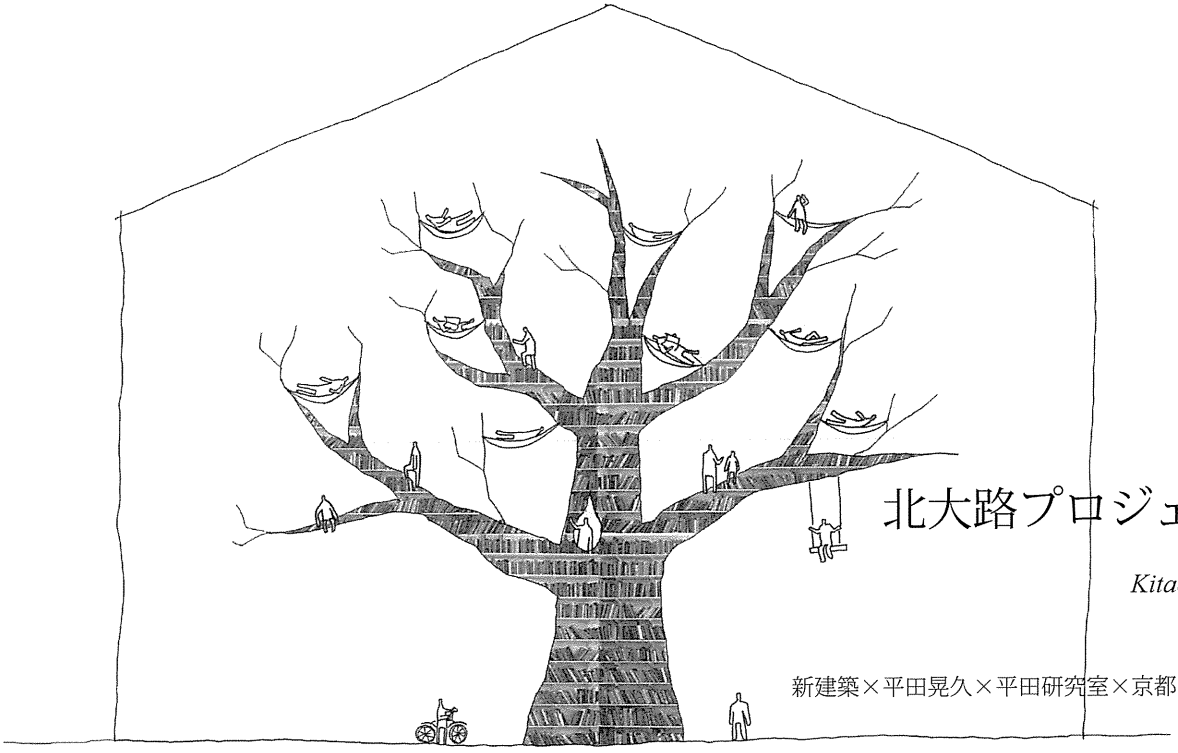
の状況を逆手にとって、設計上の分岐点となる重要な決定をワークショップの場に投げ出すことにした。決定に際してはそれ相応の説明と活発な議論が行われる。これが思いのほか面白いプロセスとなった。様々な立場や出自を持った人々が、多数のエージェントとなってそれぞれの案の中に様々なニッチ（あるいはその可能性）を発見し、そうした観点でよりポテンシャルを持った案が、議論の中で浮かび上がっていくプロセスを共有したからだ。それは、人々の雲のような無数のつぶやきが、群れとして建築案とからまり合い、それを変成させていくプロセスだった。そしてその履歴は、箱の個数や配置、それに巻きつくスロープの配置といった建築の成り立ちの中に刻まれることになった。

『太田市美術館・図書館』は、コンペによって決定された建築の形式（箱とそれを取り巻くスロープ）は保ったままで、あり得るバリエーションの選択をより拡張された場の中に投げ出しただけに過ぎないのかもしれない。しかし、ここで暗示されている、多数の人々の小さな思いの集合から、半ば自発的に浮かび上がってくるような秩序の可能性は、本質的ではないだろうか。20 世紀におけるようなマスとしての群衆に向けた最大公約数的な建築とは異なる、多様な個の集合から浮かび上がる、21 世紀の公共建築が示唆されている。

―― 北大路プロジェクト

次に平田研究室の学生が紹介する北大路プロジェクトは、建築学生のためのシェアハウス＋活動拠点であり、設計者と住まい手、運営者と利用者が、おそらく他のプログラムではあり得ないくらい重なり合う、希有なプロジェクトである。

そこには、上に述べたような形態論的／方法論的／主体論的な側面が、かつてなく興味深く交錯する可能性が秘められている。高次元に、生きている度合の高まった状態が、実現されることになるかもしれない。21 世紀の公共建築のもとになるような考え方を、ある種の理想状態の下で、実験的に浮かび上がらせることができるかもしれない。一体どんな建築と活動が生まれることになるのだろうか。



北大路プロジェクト

Kitaoji Project

新建築×平田晃久×平田研究室×京都の建築学生

2016.03 -

―― 京都の建築学生の拠点をつくる

平田研は今年から始まった研究室であるが、始まるや否やこんなプロジェクトが舞い込んできた。

―建築学生の拠点をリノベーションで設計してほしい―

建築学生なら誰もが一度は手にしたことがあるだろう、雑誌「新建築」。その新建築社からのご依頼である。対象物件は２階＋ロフト階の木造住宅で、大きな気積を有した可能性に満ちた空間だ。機能としては８人程度のシェアハウスに、住人以外の建築学生も入ってこられるようなプラスアルファの何かが求められた。

５月から７月にかけてさまざまな形で建築学生を巻き込んでいくイベントを行った。数回にわたるワークショップ(以下、ＷＳ）を北大路の家を会場にして開いた。北大路の家は現在使われていないものの、良い状態で保存されていたため、半日程度の集まりに使用することに支障はなかった。2、30人ほどの学生が集まり、グループに分かれて毎回異なるテーマについて議論を行った。議論、といってもそう堅苦しいものではない。ＷＳに参加してくれた学生は１回生から修士まで、京都はもちろん遠くは奈良県の大学の学生と、実に多様である。普段なかなか知ることのできない他大の建築学科事情に共感したり驚きながら、溢れ出すように言葉が生まれてきた。

図１　5/18　キックオフミーティングの様子

図２　7/16　宵山ゼミ（他大学との合同ゼミ）の様子

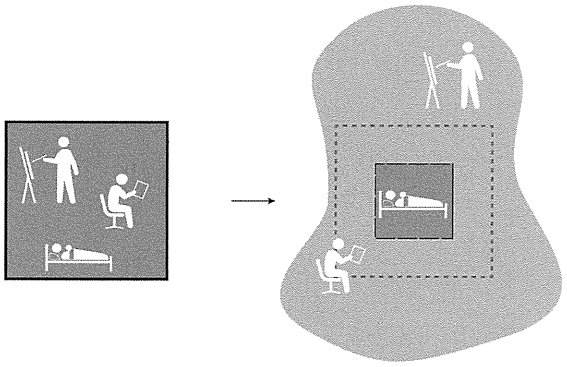


図３　どこまでが個人の領域か

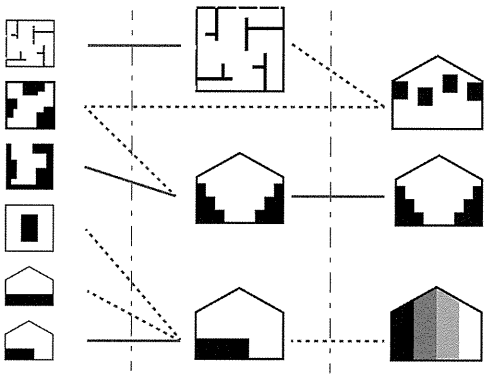


図４　スタディの変遷

シェアして豊かに

この場所で、何を、どのようにシェアできるだろうか。ＷＳを通して共にで考えてみた。

シェアハウスとして定住する「住む人」だけでなく、外部から「来る人」ともシェアできるような空間が必要である。そこで個人の領域を最小化し、共有空間を最大化することを考えた。モックアップの作成などを通し、個室を３畳まで狭くできるのではないかという手ごたえが生まれていった。数字の上では個人の占有面積は減っているものの、共用空間が増えることである意味ではより豊かになっていると捉えることもできる（図３）。そもそもシェアハウスとはシェアしてより豊かに暮らすというところに大きな意義があるはずだ。

個室が狭くなった分、これまで部屋の中にしまっておいた個人の所有物が部屋の外に溢れ出してくるかもしれない。アンケートをとってシェアできるモノのぎりぎりのラインを調査してみた。例えば、衣服。下着などは部屋の中にしまうとしても、上着は部屋の外にかけておいてもいいという意見が多かった。個人の本を部屋の外に出せば、ちょっとしたシェアライブラリーだってできる。（中には歯ブラシをシェアしてもいいという強者もいた。）

空間、モノ以外にも出来事のシェアも考えられる。この場所を使って展覧会、講演会、ＷＳといった様々なイベントを開くことが考えられるが、その運営はどのようにしてされるのか。住人主体はもちろん、友人の持ち込み企画でもいいだろう。ひょっとしたら、当日来てくれた人が後片付けを手伝ってくれるかもしれない。

このように北大路の家ではさまざまなシェアが想定される。日本においてシェアハウスの概念はまだまだ普及途上だが、本プロジェクトは新しいシェアの可能性を追求し得る実験的試みであると言えるだろう。

広がりのある立体的な空間

では、実際にどのような空間が生まれつつあるのか。人々の思いから湧き上がってくるような建築はどんな姿をしているのだろうか。

まず個室と共用空間について考えられるいくつかの関係について、研究室内でスタディを行った（図４）。そこからより豊かな共有関係を生み出せそうな３案を選んでＷＳの場に投げ出すことにした。個室が浮遊しているかのような「カプセル案」、Ｌ字ユニットが積み重なり壇上の地形を織りなす「ふろしき案」、いくつかの個室が集まってクラスターをつくる「グラデーション案」である。詳細については平田研究室のウェブサイトを参照されたい。ＷＳではイベント時の使われ方や運営の仕方など、ここで何が起こるかを詰めていく議論を行い、３案とも徐々に生々しさを帯びていった。

ある程度まで参加者の輪が広がったところで、インターネットも利用した投票を行った。結果は、「ふろしき案」が過半数を超えて１番人気となった（図５）。以前ＷＳで投票を行ったときは「ふろしき案」と「カプセル案」が票を二分したが、今回両者に大差がついたのは興味深い。「ふろしき案」の個室は他の２案と比べてＬ字の欠けている分だけさらに狭いが、それ以上に人を引き付ける魅力があったことをこの結果が物語っている。

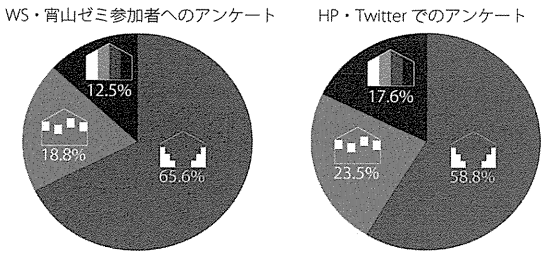
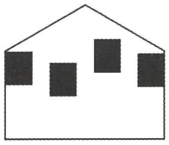
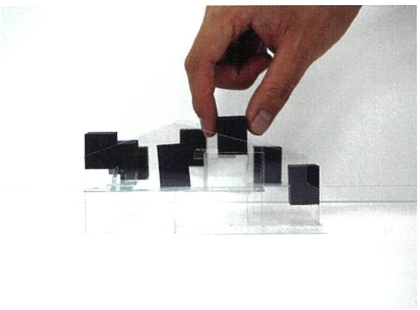


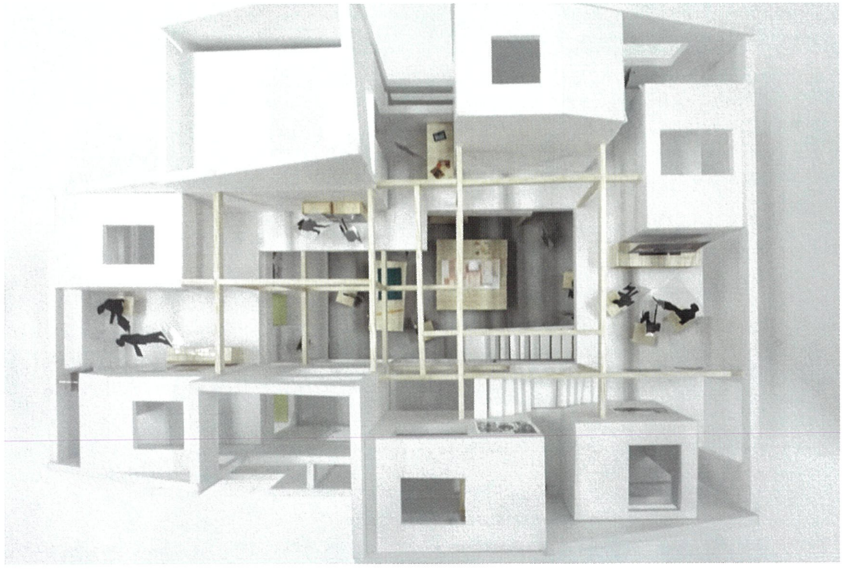
図５　アンケート結果

「カプセル案」

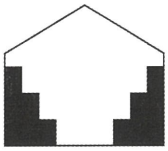


家の中にカプセル状の個室が浮くように配置する。
個室は２階以上に配され、１階は土間空間になる。

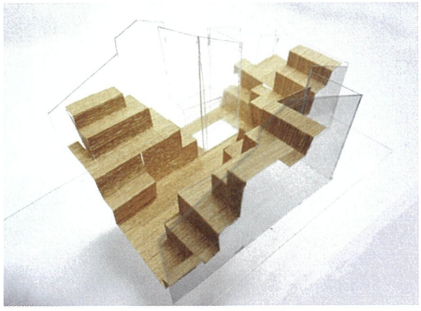




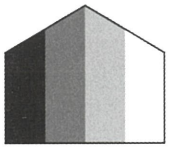
「ふろしき案」



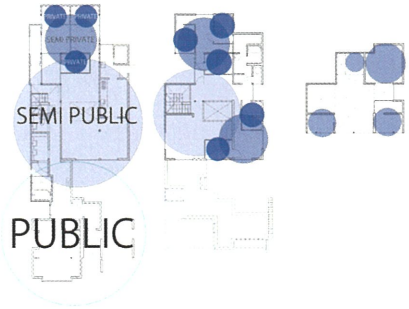
ふろしきをかぶせたような一体的な形。
立体的な空間を生かした今までにないイベントを
行うことができる。



「グラデーション案」



グラデーショナルに連続する空間をつくる。
住人の生活がセミパブリックスペースに染み出す。



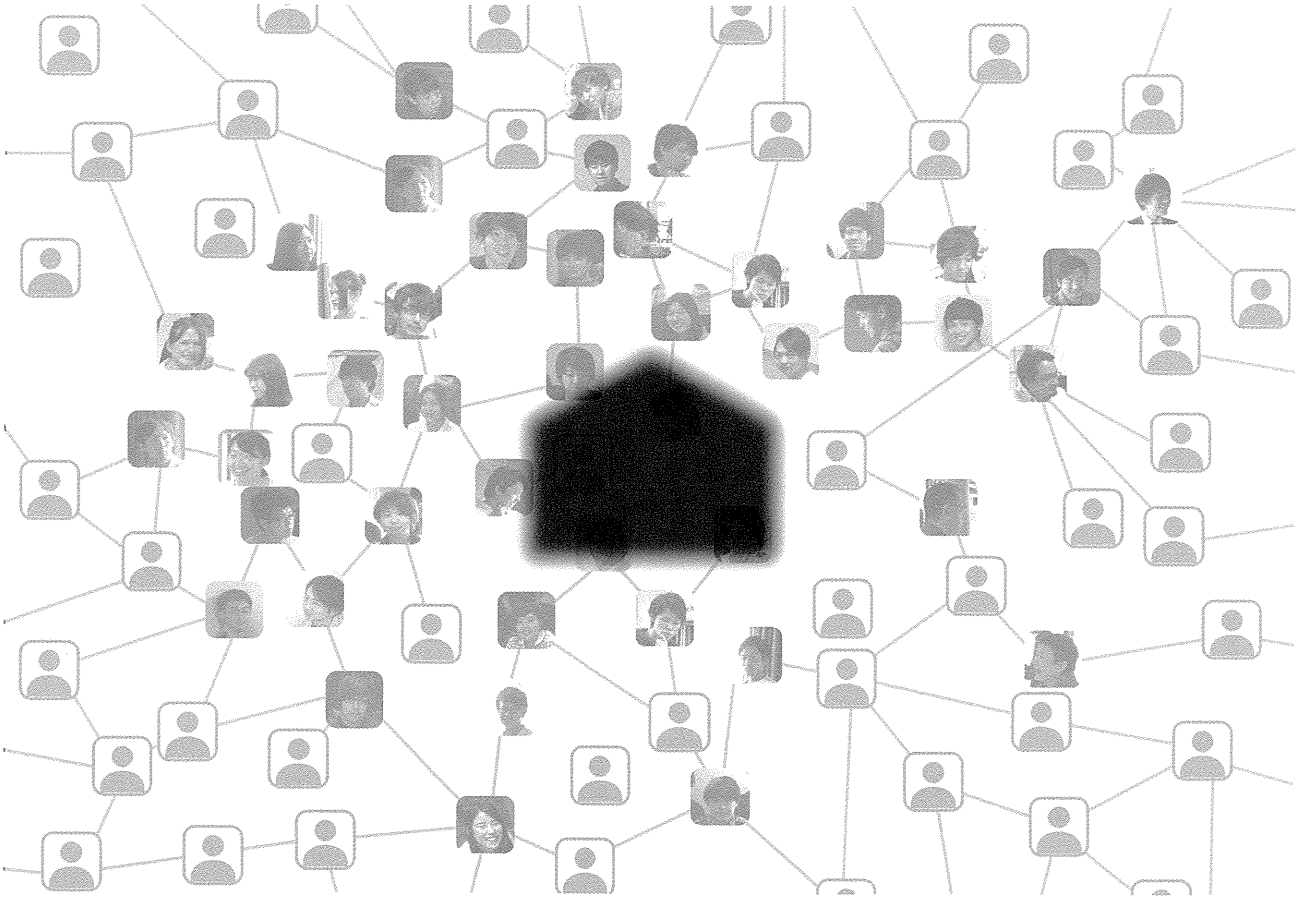


図6　人々の思いが集まって生まれる建築

――　人々の思いから立ち上がる建築

近年、ＷＳを設計プロセスに組み込む建築家は少なくない。平田晃久建築設計事務所が手掛けた『太田市美術館・図書館』（平田晃久によるエッセイ参照）もその一つの例である。そうすることによって生まれてくる建築は確かにこれまでと違う性質を持ち得るが、今回のプロジェクトは更にもう一段階異なる側面を持っている。

それは、「作り手も使い手も建築学生」であるということだ。これは設計者とクライアントの理想状態であると言ってよい。こんなことが起こるのはおそらく今回が初めてで、そしてこれが最後かもしれない。建築を志し、図面、模型といった共通言語を有し、空間に思いを馳せることができる建築学生にしか為しえない設計プロセスがあるはずだ。

今回投票によって「ふろしき案」が多くの支持を得たが、研究室内の議論だけではこの案が日の目を見ることは無かっただろう。最も個室の容積が小さくて住み手を選びそうなこの案を進めていくことに確信が持てなかったのだ。しかし、ＷＳを通して多くの反響を得た「ふろしき案」は、参加者の意見に揉まれるようにして生々しさを帯びていった。それは模型の初期案と最新案を見れば明らかだ（前頁中段）。

プロジェクトに関わる人々が増えていくにつれて、様々な意見、思いが集まり、繋がり、積み重なっていった。そこから見えてくるのは京都の建築学生が今、真に必要としているもののおぼろげな輪郭である（図6）。それはまるで古代の集落や、中世の教会建築のように、必要に駆られて自然と立ち上がっていった建築を想起させる。人々の思いがそのまま建築になってしまうかのような、新しくもあり原始的な建築の生まれ方がここにはある、そんな予感がしている。

※８月末現在、北大路プロジェクトは基本設計の段階を終え、実施設計に向けて準備を始めています。引き続きウェブサイト、Twitter などを通して情報を発信していきますので、よろしくお願いします。
Web：http://hiratalab.tumblr.com/
Twitter：@hirata_lab_ku